

第30回研究大会シンポジウム「平和の構想—ナショナリズムとグローバリズムと暴力を問う」報告

マニ教的暴力をめぐる思想的布置

—ニーチェ主義の問題性を軸芯に据えて—

清 眞人 KIYOSHI, Mahito

1 はじめに

今日の日本に暮らすわれわれにとって、たとえばイラクやパレスティナのような剥き出しの戦争とテロルの暴力が荒れ狂う現実は限りなく遠いものである。しかし、幾つかの留保をつけてであれ、第二次大戦後世界でも稀有な平和と繁栄を享受してきたこの日本においても、暴力という問題はわれわれに人間性への絶望を強いる最も重要な契機としてわれわれに直にかかわっていると言うべきである。

このように言うとき、後ですぐ触れるつもりだが、私の念頭にあるのは今日の日本の青年ならびに子どもが「イジメ」という暴力への恐怖と共に育ってきたし育っているという顕著な成育史的事実である。私はここ数年「イジメと倫理学」という授業を大学でおこなってきた。毎年その最初の回に「私のイジメ経験」というレポートを学生に書いてもらっているが、そこに書き出されてくる彼らが経験してきたイジメ経験の深刻さを考えるとき、私は今日の日本の青年の成育史的特徴を端的に「イジメという暴力への恐怖と共に育ってきた」と定義すべきだとすら考えている。

ところで、ここは唯物論研究協会のシンポジウムであるが、唯物論研究協会とマルクス主義とのあいだには深い関係があることは今更述べるまでもない。この点から言うと、暴力というテーマとマルクス主義との関係が当然問題となる。そしてそこには或る苦い逆説と今も塞がれていない深い傷口が開いていると思える。思想史的に言えば、人間にとりつく暴力という問題を徹底的に己の主題とする思想的営為は19世紀から20世紀に

かけて何よりもマルクス主義から誕生したと言われてよい名誉をマルクス主義は持つと思える。

サルトルはかつて彼の『存在と無』のなかで、フロイトの登場の意義をハイデガーの存在論とかわらせて次のような皮肉な表現で指摘した。これまで「いずれの実存哲学も、性欲の問題と本気で取り組むべきであるとは考えなかった」し、「ことにハイデガーは、その実存分析において、この問題にいささかも触れていない」。だが、「性生活というこの測り知れぬ大問題が、人間的条件に、おまけとして付け加わってくるなどということ、われわれは容認することができるであろうか？」¹と。

この彼の言葉をもじって言えば、マルクスが登場した以上人間について思索する場合に、「暴力というこの測り知れぬ大問題が、人間的条件に、おまけとして付け加わってくるなどということ、われわれは容認することができるであろうか？」ということになる。つまり、人間学的思索の不可欠の構成契機として暴力というテーマが自覚されねばならないのである。

だが、まさにこの点で、われわれは20世紀の悲劇と結びついて苦い逆説と傷に直面することになると思える。一言でいうなら、マルクス主義は資本主義と植民地主義の暴力を見事に批判し告発できたかもしれないが、この暴力と闘う過程のなかで社会主義運動がそれ自身巨大な抑圧的な暴力に変質し、社会変革の希望をいわば自己破産へと追いやることになった問題については、それを自分の考察の課題にできなかった。われわれが闘うべ

¹ サルトル、松浪信三郎訳『存在と無』、人文書院、1958年、II - 358～360頁

き、抗すべき暴力はたんにわれわれの外にわれわれの敵としてあったばかりではなく、われわれ自身の内部にもあり、そのことの痛切な自覚と省察がいつそう深い次元で暴力というテーマを人間学的思索の回避できない本質的テーマとして再発見させ、われわれの人間学的思索をいつそう深いものとするはずであった。しかし、そうしたことは「マルクス主義」という思想形態においては起きなかったといつてよい。そのことで、マルクス主義は暴力の問題を徹底的に考察する思想であるという名誉を自ら取り落とししたと思える。

そういう問題状況のなかで、私の観察するところ、暴力について思索しようとする現代の思想的営為に対して一番刺激を与えているのはニーチェの思想であり、またそのニーチェ思想を批判しようとしてそれと格闘する思索の営為である。暴力をめぐる現代の思想的布置の中心にいて、この布置の配置構造を決定している問題の軸心はニーチェ主義とその批判というテーマだというのが、ここで私が問題提起したいことである。

2 暴力・自己経験・パースペクティブ

ここで冒頭に言及しかけたこと、現代日本の青少年の内面を脅かしているイジメの経験について少し触れておきたい。二つばかり、私の授業で学生が書いたレポートの一部を紹介したい。なお一言宣伝させてもらおうと、最近私は『創造の生へー小さいけれど別な空間を創る』という本をはるか書房から出版したが、その冒頭の第一部第一章の「イジメ経験から考える」のなかにはさらにいくつか典型的な問題を表わしている印象的なレポートを引用した。それらも紹介したい誘惑を覚えるが、ここでは次の二つに限らせていただく。

A: 「…私には自殺願望はいつさいなかった。そのかわりイジメた奴らを殺したいという感情が強くあった。それとともに自分を周りに適応させよう、いたるところを変えようとした。他人に不快をあたえないように目をつけられないようにと。その

結果自分という内面は死んだようなものだった。自分は精神的に無になったのである。それとは違い、従兄弟は自分の内面を生かした代わりに外体を殺した」。

B: 「因果応報、中学の時いじめられる側に回った。机に『死ね』は当たり前・・・クラスでも物の見事に孤立した。精神的に割りと限界だったが、ある日私は果報なアイデアを得た。誰の哲学か忘れたが、この世の全て、視角聴覚味覚触覚は『悪魔』の見せるもので、全てを疑った時、最後に残るのは自分の意識だけと言うものだ。天啓を得た、と

B: 「因果応報、中学の時いじめられる側に回った。机に『死ね』は当たり前・・・クラスでも物の見事に孤立した。精神的に割りと限界だったが、ある日私は果報なアイデアを得た。誰の哲学か忘れたが、この世の全て、視角聴覚味覚触覚は『悪魔』の見せるもので、全てを疑った時、最後に残るのは自分の意識だけと言うものだ。天啓を得た、と思った。成程確かなのは私の意識だけではないか。世界が（小さな世界だが）私をさげすむから、私は逆に世界を憎悪し、見下すことをおぼえた。存在の不確かな奴ら！お前たちなどアリにも等しいじゃないか。この世は私の夢である。目をつぶれば、そう、この世で唯一存在の確かな私に確保されなければ存在するできない奴らめ！中学高校見下すことで平安を得た。表面上でどう言おうが、内面で人を見下すから誰もが私を避ける。近寄る者がいない間に、私は私の周囲に極めて強固な要塞を築いた。今私は、ただ一人が治める、たった一人の国民を有する国で生活している。内には世界への憎悪が渦巻いている」。

私の意見では、ここに引いた二つのレポートは確かに極端な域に達したものだが、しかし、決して「例外的なもの」と捉えられるべきものではない。ここに描き出されている極端さは今日の日本の青少年が普遍的に共有している暴力のなかでの「自己経験」をその濃度において凝集した場合に誕生してくる極端さであって、決して「例外的」

なそれではない。

ところで、今私は「自己経験」という言葉を使ったが、それは次の問題設定に私の関心があるからである。つまり、自己をどのように経験するか、いかなる存在として経験するか、その経験のなかからその学生はどのような彼のパースペクティブ、つまり世界・他者・自己自身を見る場合の彼特有の心理的かつ知覚的な遠近法、まさしくニーチェの言う「パースペクティブ」を紡ぎだすのか、出そうとしているのか、この問題の関連に目を据えてみたいからなのである。

レポートAはルサンチマン的暴力の問題構造である敗北的従属と復讐的攻撃性とのアンビヴァレントな一体性を典型的に示している。他者の殺害を欲するほどの暴力への衝動が、しかし、他方ではイジメを恐怖して「自分を周りに適応させよう、いたるところを変えようとした」という敗北的従属の態度と結びついているのである。マックス・シューラーはニーチェの分析に学んで、ルサンチマンとは敗北経験が生み出すマゾヒズムと一体となった他者への攻撃性だと特徴づけた。その他者憎悪の執拗な性格はルサンチマンに囚われた者をしていわば憎悪心の自家中毒にまで至らしめるものだが、その根底にあるのは復讐したくてもそれができない自分の無力性であり敗北性だと指摘した。

ここでつい先月学生が書いてきた一通のレポートの一節を紹介したい。彼女はこう書いている。「私の中学校生活は散々だった。・・・一年の時、音楽の先生が辞めた。彼女の授業は悲惨だった。・・・ある日、先生が授業中にピアノをひいていると、クラスメイトの男の子が・・・いきなりピアノのフタを力任せに閉めた。皆啞然としてただただ見ていた。先生は指の骨を折った。そして学校に来れなくなった。私の中学は荒れていて、こういうことはよくあった。私は自分が被害者にならないように毎日必死で『自分』を作った。他人に合わせて『自分』という人物を作りあげたのだ。だから今の私は『私』であって『私』でない。中学の時の経験が今の『私』を作った。私だけで

なく、何人もの人たちが『自分』という人間を作りあげたと思う。あの頃のことを思い出すと今でも寒気がする。卒業してから、駅や道で中学の友達に偶然会うと、吐き気がする。だけど何事もなかったように話しかけるのだ、『私』という仮面をつけて、『いじめ』は新しい人間を作り出すのだということを学んだ。望まれて生まれたのではない、新しい人間を」。

このような自己仮面化という自己経験、私はこれをまた「実存のタマネギ化」と呼んで学生に問題提起することが多いが、そのような自己を偽り続けることがもたらす実存的な自信喪失、自己空虚化の自己経験、こういう自己経験からどんなパースペクティブが誕生してくるのか？ それが問題である。

ところで、こうしたルサンチマン的苦境がいつそう深化して自殺の瀬戸際にまで追い詰められるならば、自殺という決定的敗北を回避する最後の手段として登場するのは何であろうか？

その問題を示しているのがレポートBである。最後の手段は世界の想像的転換(「この世は私の夢である。目をつぶれば、そう、この世で唯一存在の確かな私に確保されなければ存在すらできない奴らめ!」)なのである。サルトルはこの想像的転換を固有の意味で「審美主義的世界転換」とテーマ化している。「生きることが不可能な状況を生きうるものへと転換するために、非現実性(想像的なもの)を現実化することをもって現実性を非現実化する」という問題である。

ところで、この問題の環においてもニーチェが登場してくる。現実性を行為によって実際に変革することへの絶望を救う唯一の道は不条理に充ちた世界を審美的観点から受け入れる芸術的行為にあるという観点は、実は、ニーチェが『悲劇の誕生』で決定的に打ち出した論点であった。

こうして、いかなる自己経験が今日の人間の抱える問題の中心を形づくり、そこからどんなパースペクティブが誕生してくるのか？ という問題の設定それ自体においても、また今取り上げた三つのレポートが提出する自己経験の内容そのもの

にかかわっても、ニーチェの議論は今日の問題意識に直に訴えてくる直接性を体現しているのである。

私はここで次のことを強調したい。われわれの思索なり分析なり主張なりを多くの人々の胸のなかに届けるためには、そして彼らとのあいだにいわばソクラテス的な対話の関係性を誕生させるためには、この自己経験—パースペクティブの問題の環においてこそわれわれの言説が鋭利に介入し相手の懐に訴えかける力を獲得しなければならないのである。そして、そういう力というのはたんに説得の技術・修辞の技術といったものではなく、根本的には我が内なる暴力を見据える人間学的思索の内面性もつ力そのものが与えてくれる力だと思ふ。

別な言い方をすれば、ここで私が関心をもつのは次の問題である。すなわち、いわゆる「構造的暴力」のもとに生きる諸個人が、この「構造的暴力」をネガティブな仕方内で内面化し、その内面化の過程をとおして今度は自分を積極的に「暴力の主体」として再外面化しようとする場合、そこにどんな葛藤が生じ、どんな心理的メカニズムが働き、感情作用と想像作用のどんなアマルガムが誕生し、それが彼をいかなる「パースペクティブ」に幽閉しようとするのか、またもしこの彼を「暴力の主体」へと構成するネガティブな作用力に対して対抗しようとするもう一つの力が働きうるとしたら、その対抗力とは何か、彼をネガティブな幽閉化の力学から解放するもう一つの対抗の力学とはいかなるものなのか、等々の問いである。

この私の問題意識に関して一点だけ付け加えておきたい。かつて三木清は『構想力の論理』のなかで理性中心主義的な伝統的な人間学的観点、すなわち人間を「ホモサピエンス」として特徴づけ、固有に知的な仕方での世界把握ができる点で動物と人間とを根源的区別する伝統的な観点を批判して、人間と動物を区別する起源をなす点とはむしろ「想像力」にあるのではないかと主張した。人間的な感覚・感情作用それ自体がすでに深く想像力の作用と一体となっていて、この複合的な作

用基盤の上にはじめて知的作用が成立すると把握すべきではないか、したがって知的作用自体が既にこの感情—想像力の複合基盤によってオリエンティールングされざるをえなという事情こそ注目されねばならないと主張した。

この三木の観点は暴力というテーマに対しての私の接近方法にとって先駆的な意義をもつが、実はこの三木の観点自体、彼は一言もそう述べてはいないが、私に言わせれば極めてニーチェ的である。ニーチェにおける「自己経験」—「パースペクティブ」の問題系は彼の身体性の優位の哲学と仮象の優位の哲学と一体となって、言い換えれば、感情—想像力の複合基盤の理論を支柱にもつことで展開するのである。

ところで、ニーチェにあつては自己経験—パースペクティブの問題系は《自己の紡ぎだす仮象のなかへと諸個人は幽閉され、そこから脱出は不可能である》というテーゼに帰着するものであった。刑務所の壁とその内部に幽閉された囚人、自分の張り巡らした巣網のなかに幽閉されている蜘蛛の比喩、これこそニーチェにおける自己経験—パースペクティブの問題系の帰着点であった。ニーチェにあつては、自分がそのなかに幽閉されたパースペクティブから諸個人がいかに脱出するのか、どうやったら脱出できるのか、何がこの脱出を援助するのか、この脱出が生じるならばそこにはどんな新しい世界なり関係性が誕生するのか、そういった一連の問いはそもそも存在しない。そういう問いは、幽閉性のテーゼが絶対的に自明視されているニーチェにあつては、原理的に不可能であるがゆえに問うこと自体が無意味なのである。

ここで問題を振り返るならば、問題となったこの「自己経験」とは、先のレポートが端的に示すように、実は自己—他者の関係性の経験という問題に他ならなかった。「自己経験」とは、「自己—他者関係性経験」なのである。レポートが典型的に示していたのは、この自己—他者関係性が決定的に個人を件のルサンチマン的パースペクティブの幽閉性のなかへと追い詰めていく事例であった。

いずれの例も、その程度にいくつかの差があるにせよ、個人がルサンチマン的パースペクティブのもとへと幽閉されることで、他者とのディス・コミュニケーションに陥り、そのことによってこの幽閉性をいっそう強化せしめる悪循環へと追い詰められていくという問題を示している。

その場合、この「自己-他者」関係性が個人をこの幽閉性へと追い込んでいく力として働く場合と、逆にそれが個人をこの幽閉性から解放し脱出せしめる力として働く場合とが、対比されて論じられねばならない。だが、まさにこの点で、ニーチェにはこの後者の可能性を問う視点が無い。この意味での《他者》の思想がないという点こそニーチェを、あるいはニーチェ主義というものを特徴づける点なのである。

だが、先のレポートが必死になって探ろうとしていることは、あるいは反語的な裏返しの形で訴えていることは、自己が今や追い込まれつつあるルサンチマン的幽閉性から、しかし本当は脱出し解放されたいという痛切な魂の叫びではないだろうか？

まさにこの点において、ニーチェが鋭く体現した自己経験-パースペクティブの問題系はニーチェ主義批判の問題へと転じるのである。そのとき主題となるのは、諸個人をしてルサンチマン的幽閉性から脱出させ解放せしめる「自己-他者」関係性の力学とは何であり、それはどのように構成され、また生成するのか？ という問いにほかならない。

3 暴力のマニ教的自己表象の論理

ニーチェが体現した議論は次の点でも現代の問題に直にかかわる直接性をもっている。サルトルはその『弁証法的理性批判』において暴力をまず次のように関係主義的な観点から、言うならば「構造的暴力」の視点から出発してこう定義している。

「暴力とは、……(略)……人間の諸態度の恒常的な非人間性のことであって、要するに、各人が各人のうちに〈他者〉および〈悪〉の原理を見る

ようにさせるものなのである。それゆえ……(略)……殺戮または投獄といった、目に見える実力行使のおこなわれることは必要ではない。それどころか、実力行使の企図の現前する必要さえもない。生産諸関係が不安と相互不信の風土のなかで、『〈他人〉は反=人間で異種族にぞくする』と信じようといつも身構えている諸個人によって打ち立てられ、追求されさえすれば、換言すれば〈他者〉はどんなものでも〈他者〉たちに対して〈先に手をだした者〉としていつもあらわれることができるのであれば、それで十分なのだ」² (傍点、清)。またこうもいっている。「純粋な相互性においては、私と別な者〔他者〕も、また私と同じ者である。ところが稀少性によって変容された相互性においては、その同じ人間が根本的に別の者〈他者〉(つまり、われわれにとっての死の脅迫の保持者)として現れるという意味において、その同じ者がわれわれに反=人間として現れる」³と。

ここでわれわれが注目すべきは、かかる関係性の把握は実は既にニーチェが提出したものであったということだ。ニーチェは『道徳の系譜』のなかでまさにルサンチマンに囚われた人間の抱くパースペクティブという件のテーマに結びつけてこう言っていたのである。

「これに反し、ルサンチマンの人間が思い描くような〈敵〉を想像してみるがよい、——そこにこそは彼の行為があり、彼の創造がある。彼はまずく悪い敵、つまり〈悪人〉を心に思い描く。しかもこれを基本概念となし、さてそこからしてさらにその模倣かつ対照像として〈善人〉なるものを考えだす、——これこそが彼自身というわけだ！」⁴

ここには、暴力は己を発動させるためには他者をマニ教的な《敵》(=悪)として想像的に捏造することによって、相互性(彼のうちに我を見出し、私のうちに彼を見出す)の悪魔的転倒を引き起こす必要がある、という問題の関連が見出される。

² サルトル、竹内芳郎・矢内原伊作訳『弁証法的理性批判』I、人文書院、一九六二年、一七三頁

³ 同前、一五二頁

⁴ ニーチェ、信太正三訳『善悪の彼岸・道徳の系譜』、ニーチェ全集11、ちくま学芸文庫、三九七頁

言い換えれば、暴力は己をこのマニ教的な仮象的な想像的に捏造された自己-他者関係性へと幽閉することをとおして、躊躇なく自己の暴力を「対抗暴力」の正当性において発揮する内面的条件を獲得するのである。

ここには暴力が発動するときの普遍的な問題が浮かび上がっている。

実にこの関係性のメカニズムは子供たちのイジメ経験においても同様に確認される。イジメが発動される場合に必然的に伴うとあってよい、イジメ側がイジメラレル相手を「キショイ」「バイキン」等の呼称によって呼ぶことの意味作用は、明らかにこのマニ教的な「自己-他者」関係性の樹立にある。

そしてこのようなマニ教的な関係性の樹立は、遺憾ながらこれまでの反体制運動をも驚愕みにして、そうすることによって「解放の暴力」たらんとした「革命的暴力」をことごとく抑圧の暴力へと、あるいはルサンチマンの暴力へと変質せしめた際にも働いた論理であった。

ところで、サルトルは、暴力の成立論理そのものであるこのマニ教的な相互性切断に対抗して相互性の絶えざる回復という倫理的実践の立場を対置した。

他方、病者の視点と健康者の視点とを往復できる自分の能力を誇示したニーチェは、この点でまさしくルサンチマン暴力のマニ教的病理を鋭く見抜いたにしろ、彼の哲学の根底にある反・相互性の「単独者」主義はニーチェをサルトル的=レヴィナス的な「他者性の倫理」に導くものでは到底なかった。というのも、その「単独者」主義は幽閉性からの諸個人の解放を可能とする「自己-他者」関係性という問題設定を原理的に拒絶するものだったからである。

こうしたニーチェ主義に対する批判と対抗は、元来はニーチェの系譜に立つと思われる思想家からも打ち出されてきている。たとえば、去年 10 月に雑誌『現代思想』のジュディス・バトラー特別号に発表されたインタビュー(「平和とは戦争へ

の恐ろしいまでの満足感に対する抵抗である))に現れている彼女の反マニ教主義の立場は本質的にサルトルと同一であるとともに、「傷つきやすさ vulnerability」という感受性をこの「応答責任の倫理」の遂行の土台に据える点でレヴィナスを継承している。この彼女の立場は、レヴィナスと同様、生の本質にたんにニーチェ的な男性主義的で所有主義的な「力への意志」を見るだけでなく、それに対抗する生の本質をなすもう一つの要素として母性主義的な感受性としてこの「傷つきやすさ」を評価するものでもある。そもそも「応答責任の倫理」という立場それ自体が反ニーチェ的なのである。

4 ブーバー的源泉、あるいは

20 世紀精神史の隠れたる震央

マニ教的暴力をめぐるニーチェとサルトルとのあいだに存する対立はレヴィナスを経由して「私-きみ」の対話と共生の哲学を提唱したマルティン・ブーバーの存在を、20 世紀実存思想の——ハイデガーと並ぶ——もう一つの震央として指し示す。キルケゴール-ニーチェ-ハイデガー-バタイユ-フランス・ポストモダン思想(フーコー・ドゥルーズ・ボードリヤール等)という「単独者の哲学」という系譜とブーバー-レヴィナス-サルトル-ジュディス・バトラーという系譜(仮にこれを「対話=共生者の哲学」と呼ぶ)との対立は 20 世紀思想の隠れたる震央である。この問題の文脈はこれまでの 20 世紀精神史において事柄の重要性に見合った注目をまだ十分には受けていない。

ここでは時間の関係上指摘だけにとどめる。

5 ニーチェ主義者ボードリヤールの隘路

最後にボードリヤールについて少しか触れておきたい。

晩年のボードリヤールが現代社会批判の中心的テーマとして押し出したものは、IT 革命とそれを

中心的手段とするグローバリゼーションによって推進される現実性のヴァーチャル・リアリティー化が他者の他者性の消滅をもたらし、諸個人の主観性の極度のナルシズム化をもたらすことの告発であった。彼によればこの他者性の消滅過程は、一方では、このIT革命＝グローバリゼーションの恩恵に浴する先進諸国家ならびにこの恩恵に自分たちもまた浴することを己の必死の追求価値とするに到った後続の準先進諸国の社会＝文化構造に限りなき同質集団化を引き起こす。また他方では、元来他者との出会いによってこそ引き起こされる諸個人の真に創造的な自己生成のドラマ——自己の内なる《他者》が外なる《他者》との出会いによって賦活させられることを原動力とする——をそれらの地域では今や停止に到らしめるものなのである。

言い方を換えれば、現実性のヴァーチャル・リアリティー化とは、物理的闘争的暴力によってではなく、諸個人の想像力（＝記号論的欲望）をナルシスティックな自己肯定へと誘惑し誘導することで、他者の他者性を消滅させるという特有の象徴作用的＝想像力的暴力によってわれわれの世界が覆われるという事態なのである。

このボードリヤールの問題認定は、フランス文化圏において戦後の後期サルトルが代表的に具現したような「疎外＝他有化」論的視角からの批判思想がその効力を失ったという精神的認識を随伴するものであった。サルトルの『聖ジュネ』やアルジェリア解放戦争の渦中で執筆された『弁証法的理性批判』が雄弁に物語るように、サルトルはフランス白人中産階級の世界観を告発し問いただすもの、つまりこの世界観にとっての飛び切りの《他者》としてジュネやファノンの視点を問題にし、前者が後者の視点のもとに他有化され疎外される（＝レヴィナスの「内存在性」の概念が指示するような精神的自己充足性を剥奪され弾劾され傷つけられるという）痛切な経験を反転のバネにして、前者が真の自己批判に導かれ、己の自他双方に対する権力性・抑圧性を克服し、己における実存の創造的自由の取り戻しと人間間における

真の人間の連帯性＝相互性の普遍的生成とを統一的に把握する展望へと進出する精神の展望を描こうとした⁵。

とはいえ、ボードリヤールによれば、精神の解放に寄せるこうしたサルトルの展望は現実性のヴァーチャル・リアリティー化の前に失効したのである。たとえば彼は『完全犯罪』のなかでこう書いている。《ところで、他者を奪われることは自分自身を奪われることよりもはるかに深刻な事態だ。他者性の剥奪は疎外より悪い状態であり、弁証法的対立の清算をつうじた致命的な変質である。客体（＝対象）のない主体、他者のない同一者というとりかえしのつかない不安定な段階——同一者の転移による決定的な停滞。個人にとっても、自動的にプログラミングされ、自動的に指向対象を設定するわれわれのシステムにとっても、それは不吉な運命をもたらす》⁶と。

では、代わって、ボードリヤールはいかなる批判と解放の展望を立てるのか？ それともいかなる展望もなくなったのか？

少なくとも、ボードリヤールの主観のなかでは一つの展望が誕生する。それは一種のテロリズム称賛のいわば自己処罰的展望である。現実性のヴァーチャル・リアリティー化は社会構造の完全な同質化と諸個人の主観性の完璧なナルシズム化をもたらすというボードリヤールの理論は一つの補完的展望を伴っている。彼によればこの過程は、その果てに、この過程にもはやいかなる仕方でも組み入れることのできない、この過程とはいかなるコミュニケーションも断固として拒絶する「ウ

⁵ いかにボードリヤールの問題認定がこの意味でのサルトルとの対決的対話（＝継承的反転）のなかから誕生しているかは、彼の『象徴交換と死』第5部第1章「死者の売り渡し」における「人間」概念批判や『透きとおった悪』のなかの「疎外」概念の失効に関する議論（邦訳、163～164頁）に明らかである。それらは何よりもサルトルを念頭にして、彼の問題設定の妥当性を否定しようとしているのであり、そのサルトルとの強烈な対決関係によっていわば彼に逆接しているとも言えるのである。

⁶ ボードリヤール、塚原史訳『完全犯罪』、紀伊國屋書店、1998年、166頁。なおこの一節も念頭にあるのはサルトルである。

イルスの強烈な病理⁷としての、自己を絶対視し悪の自己確信に燃え立つ「マニ教的な悪」⁸、人間の内なる「呪われた部分」⁹の代表的な外部的具現としての「特異性」¹⁰の極まりとしての《他者》、いわば「絶対他者」を己のシステムの外部に必然的に誕生させるというのである。

彼はこのウイルス的他者の誕生に一つの展望を託す。このウイルス的他者によるシステムへのテロルによって「システムの安定性を動揺させる」¹¹という「状況の詩的転覆を想定する別な仮説」¹²が一個の展望として、かつてのシュルレアリスト的な絶対否定の呼号を思わせる形で¹³、ボードリヤールによって語られることになるのである。

したがって、彼にあつてはサルトルとは正反対に、あるいはニーチェとすら反対に、マニ教主義はなるほど逆転せしめられるというアイロニカルな仕方であるとはいえ称賛の対象となる。逆転したマニ教主義、悪の絶対的自己確信に到達した「特異性」のテロリズム、一切のコミュニケーションを拒絶する峻厳性を体現するウイルス的他者のテロリズムこそが、一切を「自己同一」化するヴァーチャル・リアリティーの世界への真の唯一の対抗を意味するのである。他者の他者性を消去するヴァーチャルな暴力に対抗する道は真正なコミュニケーションの努力ではなく、テロリスト的暴力の象徴作用的衝撃の道以外にはないという展望が、ボードリヤールの掲げる展望なのだ。

だが、これは一つの展望なのだろうか？ 否、それは絶望のボードリヤールの表白なのではな

いだろうか？

結論から言えば、ボードリヤールの問題認定は「先進諸国」に生きるわれわれが今日新たに直面している問題の一面を鋭く切り出すものであるとはいえ、彼がそこから引き出す帰結は絶望的なものであり、彼が問題にした当の問題に立ち向かおうとする社会闘争を誤ったテロリズム的方向へと導き、その闘争エネルギーを分解し、不毛で危険な袋小路へと追いやるものである。その破壊主義的テロリズムの方向性は、かつてアーレントやサルトルが第一次大戦前夜の西欧の反抗的な青年知識人の精神状況を批判的に回顧して、それがファシズムの精神的温床として機能したことを鋭く自己批判的に抉り出した精神史的状况、アーレントが「哲学となったテロリズム」と名づけた精神史的状况の二番煎じ的な称揚である。

彼の問題認定は正しかったが結論の出し方に誤りがある、というのではもちろんない。問題認定の仕方、その一面性にそもそも問題があるからこそ、誤った帰結が生まれたのだ。そしてまた彼の思考が「哲学となったテロリズム」の再現である理由もそもそもこの問題認定の一面性にあるのだ。

とはいえ、彼がそのような一面性へと導かれたという思考の苦境性そのものは実はわれわれ自身が置かれている今日の苦境を象徴するものである。その意味で、彼の思考を批判的に分析することはわれわれ自身にとって重要な意味をもつ。それは、われわれの通ってゆかねばならない隘路を自覚し、この隘路を通り抜ける際にわれわれが身を委ねかねない誘惑の危険と正しくこの隘路を通り抜ける方法をわれわれが自覚するうえで、大いに資するに違いないのだ。

もはやこれ以上論じる時間がないので、このボードリヤール批判の作業は彼の思想の根底に据えられているニーチェ主義を問題として抉り出し、それと対決することを必須の作業として含むことを一言指摘しておくだけにとどめる。まさにここでもわれわれはニーチェ主義をいかに批判するか

⁷ ボードリヤール、塚原史訳『完全犯罪』、紀伊國屋書店、1998年、167頁

⁸ ボードリヤール、塚原史訳『不可能な交換』、紀伊國屋書店、2002年、132頁、等

⁹ 同前、81頁、等

¹⁰ 同前、186頁、等

¹¹ 同前、28頁

¹² 同前、159頁

¹³ まさにこの点をめぐって、『文学とは何か』におけるサルトルのシュルレアリスム批判は成立していた。そこでのサルトルの批判は本質的にボードリヤールに対して妥当する、と私は考える。なおこの件をめぐっては、拙著『実存と暴力——後期サルトル思想の復権』(御茶の水書房、2004年)、「サルトルのシュルレアリスム批判」の節(45～49頁)を参照されたし。

という問題が現代思想の根本問題の一つをかたちづくっていることを確認するのである。

なお、以下私のこの件にかかわる議論を文書として掲げておく。

補遺 ボードリヤールにおけるニーチェ主義

ボードリヤールの思考が、彼を現代思想家としてデビューさせた消費社会の身に纏うイデオロギー(=神話)の記号論的な批判分析から始まって晩年のヴァーチャル・リアリティー批判に到るまで、いかにその発想の根底においてニーチェの影響を受けているかということは、彼の諸著作を読めば一目瞭然である。事実彼自身が随所に渡ってニーチェに言及し、ニーチェこそが自分の分析視角の思想的源泉であることを明らかにしているのだ。

では、その源泉としての作用はニーチェ思想のいかなる要素から発するのであろうか？ 実にそれは、ニーチェ思想の核心をなす相互に切り離せない二つの要素、すなわちニーチェのパースペクティブ主義と彼の「例外者」の「単独者」主義からやってくるのである。

周知のとおり、ニーチェのパースペクティブ主義は次のモチーフから構成されていた。すなわち、——諸個人は己の存在をどのようにまたいかなる存在として決定的に経験したか、その「自己経験」上の決定的な特質・特異性を元手に、つまり三木清風に言えばそれを「基礎経験」とすることによって、そこから自分が世界を感受し眺望する際の「地平」を切り出し、この「地平」の上に自分の世界に対する「パースペクティブ(遠近法)」を誕生させる。しかも、諸個人はあたかも囚人が刑務所の壁の内に幽閉され、蜘蛛が自分の紡ぎだした蜘蛛の巣の内部に幽閉されているように、この自分が「自己経験」から紡ぎだしたパースペクティブの内部に幽閉されたままであるほかない。

——したがって、人間にとっては真実在と仮象との対置を前提にした真理認識への認識努力とい

う認識論的問題設定は失効する。というのも、諸個人は自己の紡ぎだしたパースペクティブの幽閉性をいかにしても打ち破れない以上、言い換えれば仮象をいかにしても打ち破れない以上、真実在の認識という真理要求自体が絶対的に実現不可能であるがゆえに、立てることが無意味な要求だからである。だからこの観点からすれば、そもそも実現不可能な真理認識の要求を自己の生の中心的要求に掲げるといった学者特有の生態度の心理学的分析こそが興味ある有意味な問題となる。なにゆえに学者的な生態度はかかる実現不可能で無意味なる要求によって自己を定義し意味づけようとするのか、その心理学的意味とは何か？ 真理認識の要求それ自体が学者的な生態度がひそかに自分のために要求する幻想、自分をそれで包みたいと願う幻想への誘導路なのではないのか？ これこそが問題の実相であり、かかる意味で一切の認識論的問題設定は心理学的問題設定へと変換されるべきである。——

こうした一続きの主張によって織りなされたものがニーチェのパースペクティブ主義にほかならない。

では、第二の要素であるニーチェの「単独者」主義はこの第一の要素とどのように絡み合いながらニーチェ思想の核心を形成することになるのか？

そもそもニーチェのパースペクティブ主義は、己を他の誰ともいかなる共通性・共有性・相互性をもたぬ「単独者」たる「例外者」として経験するという、ニーチェ自身の「自己経験」の「特異性」を元手に、この「自己経験」と己の世界観との切り離しがたい関連についての鋭利な自己観察の成果として誕生したのである。

ニーチェ自身は己の単独者的特異性が自分のいかなる情動的な変奇性にあるのかを直截な形では決して詳らかにしなかったが、彼の全著作はそれがキリスト教的道徳と根底的に衝突する性質をもったそれであったろうことを暗示している。後に、自分ほどにニーチェを理解する者はいないと自負したバタイユが人間の内なる「呪われた部分」

と呼び、ボードリヤールがこの人間認識を受け継いだところの「呪われた部分」、「病気、死、否定性、暴力、異質性」¹⁴等の言葉でこそ指示される人間の情動層、いわば健全なる「市民社会」的な人間、あるいは人間の共同的普遍性を重んじる普遍志向的な人間にとっては反価値的であるがゆえに《他者》的である暗黒の情動層、それがニーチェ自身の「自己経験」の核心に据えられていることは明白である。この情動層の断固たる反キリスト教的=反道徳的な肯定にこそニーチェの言う「力への意志」と「主人道徳」の思想の核心が、つまりはニーチェ的個人主義の核心が存することは火を見るよりも明らかである。

ボードリヤールが消費社会の「差異化」のイデオロギーの逆説的な同質化作用を批判し、真の「個性」は個人の比較を絶した「特異性」の肯定によってしか主張しえないと述べ、「個性」はたんに「没個性」の同質性に対してだけでなく、他の「個性」に対しても本質的に対立的で闘争的であるしかないとみなしたのは、彼の思想の根底にこのニーチェの単独者主義が据えられているからである。

したがって、十分注意されなければならない点は、ボードリヤールにあっては真の「個性」は、たんに現在の社会で推奨されている「コミュニケーション」なるものがその実他者の他者性を「無菌的に流出させる」ことでそれを消滅させる作用を担っているからというばかりでなく、本来いかなるコミュニケーションであろうと、コミュニケーションには元来的に敵対的な関係にあるものとして捉えられていることである。

彼が他者性の消滅をもたらす現実性のヴァーチャル化に対抗する展望をいかなる意味でも真正なコミュニケーションの実現を追求するという方向性に見出さず、逆転されたマニ教主義としての悪の自己確信に依拠するテロリスト的暴力の発揮のなかに見出そうとする根底には、この原理的に反コミュニケーション的なニーチェ的個人主義が据えられているのだ。

ところで、まさにこの「他者の他者性」の擁護

という件の主題そのものにかかわって次の問題が興味深い問題として浮かび上がる。前述のごとく、ニーチェにあってはそのパースペクティブ主義は諸個人の仮象内幽閉性のテーゼと不離一体の関係にあるものであった。

では、根本的にニーチェ主義者であるボードリヤールはこの点でもまたニーチェの継承者なのであろうか？

興味深い問題は、もしニーチェのパースペクティブ主義を一貫して貫くならばボードリヤールがたとえテロリスト的暴力に訴えてでも擁護しようとする「他者の他者性」というテーマそれ自体が成立しないはずだということである。なぜなら、「他者の他者性」というテーマが意味をもちうるのは、諸個人がその「自己経験」から紡ぎだす彼特有のパースペクティブ、言い換えれば、彼固有の仮象が彼に押し当てる幽閉性から彼は何を契機にして脱出可能となるか？ という問いが立てられる場合だけだからである。

サルトルがその『存在と無』以来後期においても一貫して追求してきた「他有化」(=疎外)の問題は、そのジュネ論やファノン論が典型的に示すように、またボードリヤールがその失効を主張するときには実は前提的に承認しているように、まさに諸個人の自己意識そのものに宿る根源的な「自己同一性」のナルシズムに亀裂をいれるものとして「他者の他者性」の作用力をいかに肯定的=積極的に評価するかという問題であった。つまり、ニーチェのパースペクティブ主義にかかわらせて言えば、そのパースペクティブ内幽閉主義を批判して、諸個人にその幽閉からの脱出をひとまず「他有化」(=疎外)という形で強制するものとして、そしてこの「他有化」(=疎外)の直視と敢然たる引き受けがその諸個人の側に起こるならば己にとりついた幽閉性からの脱出への自覚的なコミュニケーションの努力が開始される契機として、まさに「他者の他者性」を問題にした思想こそがサルトルの思想であった。ついでに言えば、この点でサルトルとレヴィナスのあいだには深い連帯関係があった。

¹⁴ 『完全犯罪』、167頁

この点では、ボードリヤールはニーチェ主義者でありながら、ニーチェ主義からは原理的に出て来ようのない「他者の他者性」の問題を自分に与えているのである。あるいはこういう言い方もできる。彼は、ニーチェ主義からは原理的に出て来ようのない「他者の他者性」の問題の地平の上に彼のニーチェ主義を立て直そうとしていると。

それはボードリヤールの次のような問題設定のなかに明瞭な姿を映し出している。彼は『暴力とグローバリゼーション』のなかでこの問題を提起している。

「可能なかぎりでのすべての『私=自己』のうちで、ひとつだけが『私=自己』としてのアイデンティティを獲得しますが、他者としての『私』も、いわばパラレルに存在し続けるのです。主体の内面の他者性を構成するのはこうした『他者』たちであり、それらは折にふれて透けて見えて、『私』のアイデンティティを挫折させます。・・・(略)・・・この複数の分身なしには、つまり、出現しなかったとはいえ、影のように『私』につきまとい、好運あるいは不運なやりかたで干渉してくるあの複数の『私』なしには、個人は自分自身の同語反復となってしまふでしょう。個人は現にそうであるもの以外ではありえなくなってしまうでしょう。そうなれば、生成発展も、変身のゲームも、もはや問題ではありません(ところが、あらゆる文学、とくにロマンはこの他者性のゲームによって成立するのです)」¹⁵。

注目したいのは、ここで彼のいう「影のように『私』につきまとい、好運あるいは不運なやりかたで干渉してくるあの複数の『私』」とは、同時に或る外なる《他者》によって代表的に具現されたものとして私にかかわってくるという関連をもつてボードリヤールにおいて問題にされていることである。彼のこの一節の主張点は、そういう私の自己変革(「生成発展」・「変身のゲーム」)の触発的契機という役割を果たす外なる《他者》の存在を現実のヴァーチャル化がさしあたって高度消費

資本主義社会の住人の意識から消滅させてしまうという点にある。

言い換えれば、ボードリヤールはここでニーチェの自己アイデンティティの複数性の思想を、ニーチェのなかには存在しない「他者の他者性」ならびに「他有化」(＝疎外)の観点と結びつけることで、《他者》との出会いと交流のみが自己アイデンティティの創造的生成をもたらすという思想へと転形し発展させたと言っているのだ。言うまでもなく、この自己アイデンティティの創造的生成はその個人がそれまで彼に取りついていたパースペクティブの幽閉性から自分を脱出せしめるという過程を随伴するものである。つまり、こうしてボードリヤールは「他者の他者性」という観点を取り入れることで己をニーチェ主義から脱出せしめていると言っているのだ。

とはいえ、この脱出もボードリヤールにあっては再びニーチェ主義のもとへと回収されざるをえない。実にこのことこそ最終的なボードリヤールの問題性であると思われる。

というのも、ボードリヤールが上記のように語る時も、実はそこで言う自己の内なる《他者》としての影的な複数の「私」とはあのバタイユの言う自己の内なる「呪われた部分」のことだけを指し、したがってまたその「私」を賦活せしめる作用力としてそれを外部的に代表的に具現する《他者》とは既に『消費社会の神話と構造』の最終章で語られていた「(ア)マリ(異常)の諸形態の問題)として現れてくる「新しい暴力」の体現者のことではないからである。

ボードリヤールの翻訳を一手に引き受けている塚原史は、『消費社会の神話と構造』に代表される前期の思索と『透きとおった悪』以降の晩期の思索とのあいだに「差異」から「他者」への視点転換を見出し、その転換性を強調するが、その捉え方はいささか単純すぎる。晩期の思索で中心に躍り出てくる「ウイルス的他者」の概念の前身は既に『消費社会の神話と構造』の最後に登場するこの「新しい暴力」の概念のなかに与えられていたのである。

¹⁵ ボードリヤール、塚原史訳『暴力とグローバリゼーション』、NTT出版、2004年、33頁

それは次のように特徴づけられていた。すなわちそれは、《豊かさと安全が一定の段階に到達したときににじみ出てくる統御不可能な現実の暴力》¹⁶であり、「突発的で不可解な現象」として出現し、《貧困と窮乏化と搾取が生み出す暴力とは本質的に異なる》¹⁷という点で《「対象をもたない」暴力》と特徴づけられる。その本質は、ボードリヤールによって《単に豊かさに関する社会学的バラツキの問題ではなく、豊かさそのものの根本的矛盾の問題である》¹⁸という点にあるとされ、《欲望のまったく肯定的側面によって排除され、隠蔽され、検閲された欲望の否定性の顕在的出現としての行為》¹⁹。《生産性と消費性の至上命令に立ち向かう破壊性（死の衝動）の出現としての暴力》²⁰にあるとされた。

かかる現代消費社会の住人の自己の内なる暴力、その「呪われた部分」に挑発的に関与し賦活作用を及ぼす「ウイルス的他者」の暴力、実はこれがボードリヤールが問題にした自己の内なる《他者》とそれを代表的に具現する外部の《他者》との出会いと交流の関係性を論じたときの実質的内容であったのである。

¹⁶ ボードリヤール、今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』、紀伊國屋書店、1995年、267頁

¹⁷ 同前、271頁

¹⁸ 同前、268頁

¹⁹ 同前、271頁

²⁰ 同前、271～272頁